

## ベルクソン哲学における「揺れ (oscillation)」

—持続との関連で見るとその発展的機能—

(要約)

序

アンリ・ベルクソン (Henri Bergson, 1859-1941) の哲学は、時間経過の質的側面を意味する「持続 (durée)」の概念を中心に展開されている。とはいえ、持続の概念は著作を追うごとに伏流水と化していくかのような特徴を有するため、持続という語だけにとらわれていると著作同士の繋がりが分かりづらくなることがある。本論は、機械的なニュアンスを持つがゆえにベルクソン哲学の本質を見誤らせる恐れがあるとしてこれまで正面から論じられたことのなかった「揺れ (oscillation)」に持続の概念と不可分な性質を見出すことにより、徐々に潜行していく持続の概念を追跡し、ベルクソンが四つの主著のあいだに構築したと思われる有機的関連に光を当てようと試みる。

本論は五つの章から構成される。第1章から第4章にかけては、ベルクソンの四つの主著、すなわち『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』、*Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889)、『物質と記憶』(*Matière et mémoire*, 1896)、『創造的進化』(*L'évolution créatrice*, 1907)、および『道徳と宗教の二源泉』(以下『二源泉』、*Les deux sources de la morale et de la religion*, 1932)の中で揺れの語が見られる箇所を取りあげ、どのような文脈で用いられているかを精査する。各著作で論じられる主要な問題や概念と、揺れが見られるそれぞれの文脈とのあいだに関連性を見出すこの分析は、著作ごとの揺れの意味を明確にし、持続と不可分な揺れの性質を示すとともに、『試論』から『二源泉』に向かうにつれて生じる持続と揺れの関係のあり方の変化をも浮き彫りにする。とりわけ『試論』と『二源泉』の両方に登場する振り子の揺れの例は、持続と揺れの関係の変化の様相を浮かび上がらせるだろう。

これらを踏まえ最終章の第5章では、持続と揺れとのあいだに見られる不可分な関係、およびその関係のあり方の変化という二つの論点が、ベルクソン哲学内外の論点と繋がりを持つことを検証する。その過程で、第1章から第4章にかけて引用される揺れの語を含む箇所が、ドゥルーズ (Gilles Deleuze) における「差異 (différence)」の概念や、ベルクソンにおける他の概念を潜在的に基礎づけている可能性が示されるだろう。これらの議論を経て本論は、揺れに注目した解釈が有する普遍性の一端を提示すると同時に、ベルクソン

哲学の全体的解釈における揺れという語の重要性を指摘する。

## 第1章 『意識に直接与えられたものについての試論』に見る「揺れ」

第1章では『試論』における揺れを検討し、その基本的な性質について論じる。全三章からなる『試論』には各章に揺れの語が見られるので、章ごとの意味を比較する。

第1節と第2節では、ベルクソンの用いる具体例から、持続と相容れない揺れ、持続と両立する揺れという二つの側面を挙げ、外的なものでありながらも内的生成に寄与するという二重の役割を揺れに見出す。

第3節では、揺れが有する二つの側面を統合するような観点にベルクソンが言及していることに注目しながら、持続と揺れとが結びついて働くことで、両者のあいだに不可分な関係が成り立つと推測する。

第4節では、第3節での推測を裏づける作業を行い、外的な揺れとは質の異なる揺れが内部にも潜在的に存在し、その内的な揺れが生成に寄与している可能性を示唆する。

## 第2章 『物質と記憶』に見る「揺れ」

第2章では『物質と記憶』における揺れを検討する。『物質と記憶』の中心的主題は、従来の二元論とは一線を画し、精神と物質の接点にこだわるベルクソン独自の二元論である。我々は、この二元論を手がかりに揺れの語が見られる箇所を解釈しながら、第1章で導かれた、持続と共存しうる揺れの存在を確認する。

第1節では、『物質と記憶』と『試論』のあいだに議論の繋がりがあることを確認し、『物質と記憶』においても『試論』から導かれた揺れの性質を追究しうると判断する。

第2節ではベルクソン独自の二元論の仕組みを説明する。ベルクソンの二元論では、精神と物質とは動きをもって接している。両者のあいだでなされるやりとりが、『物質と記憶』において揺れを解釈する手がかりとなる。

第3節では揺れの語が見られる箇所を取りあげる。この箇所における揺れの意味を検討するなかで、『物質と記憶』におけるベルクソンの議論の核心部分が揺れと密接な関わりを持っていることを明らかにする。

第4節では『物質と記憶』における持続と揺れのあいだの関係について考察する。『物質と記憶』では持続と揺れの関係が直接的に示されることはないが、ベルクソン独自の二元論の仕組みから、それを間接的に知ることは可能である。精神と物質のあいだでなされるやりとりには、持続に沿って続いていく揺れが見出される。第1章で導かれた、持続と共存しうる揺れが存在する可能性は、こうして裏づけられる。

### 第3章 『創造的進化』に見る「揺れ」

第3章では『創造的進化』における揺れを検討する。ベルクソンはこの著作で生物学的な観点から独自の進化論を展開している。我々はこの進化論の解釈を通して、『創造的進化』に見られる揺れがベルクソンの議論の中心部と関わっていることを明らかにするとともに、持続と揺れの関係のあり方の変化について論じる。

第1節では、『創造的進化』と『試論』および『物質と記憶』との繋がりに注目し、『創造的進化』においても揺れの議論を継続しうると判断する。

第2節ではベルクソン独自の進化論について説明する。ベルクソンは、いわゆる進化論者の考えを批判しながら、生命の豊かさを強調する進化論を構築する。その理論の根拠には、『試論』や『物質と記憶』で論じられた内容が見出される。そこで我々はこの進化論を通して、『試論』および『物質と記憶』で見られた揺れとはさらに性質の異なる揺れのあり方が『創造的進化』に見られるであろうと推測する。

第3節から第5節では揺れの語が見られる箇所を取りあげる。ベルクソンの挙げている具体例から、持続とともに生命の進化の一端を担う揺れの性質を導き、もはや持続と一体であるとさえ言うかのような揺れが存在することを明らかにする。持続と揺れの結びつきは、『物質と記憶』と比較するとやや強固になっていると言えるだろう。

### 第4章 『道徳と宗教の二源泉』に見る「揺れ」

第4章では『二源泉』における揺れを検討する。『二源泉』は「閉じたもの」と「開いたもの」という新たな論点を提示し、『創造的進化』とは異なる社会的な観点から進化について論じている。我々はこの新たな進化論を通して、『二源泉』に見られる揺れがベルクソン

の議論の核心と関わりを持つことを明らかにしたうえで、持続と揺れの関係のあり方にさらなる変化が見られることを示す。

第1節では『二源泉』と『創造的進化』との繋がりに注目し、揺れについての議論を継続しうることを確認する。

第2節では閉じたものと開いたものについて説明し、『二源泉』で論じられる真の意味での人間の進化について考える。

第3節から第5節では揺れの語が見られる箇所をそれぞれ取りあげる。我々はこれらの箇所を通して、ベルクソンの社会的進化論が振り子の揺れに見られる往復運動に着想を得ているのではないかと考え、社会的な進化に対するベルクソン独自の考えを明らかにする。そして一連の議論を踏まえ、社会的な進化の過程では持続と揺れのあいだにもはや分離不可能な関係が築かれることを示唆する。我々はこの、『創造的進化』と比べてさらに強固になっている持続と揺れとの結びつきを見出す。

## 第5章 「差異」の考察から導かれる「揺れ」の積極的な流動性

我々は第1章から第4章にかけて、持続と揺れが不可分な性質を持つことを見出すと共に、両者の関係のあり方が著作ごとに変化し、徐々に結びつきを強めていくのを見た。第5章ではこれまでの議論を踏まえ、ベルクソン哲学内外の論点との繋がりを構築し、揺れが解釈上意味を持つ重要な語であることを示す。

第1節と第2節では、ドゥルーズの論文「ベルクソンにおける差異の概念」(Gilles Deleuze, « La conception de la différence chez Bergson », 1956) の要点を本論第1章から第4章までの内容と照らし合わせ、ドゥルーズの差異の概念を通してベルクソンの揺れの重要性を提示する。また、持続と揺れのあいだに見られる不可分な関係が、ドゥルーズの議論によって検証可能であることをも確認する。

第3節では、ベルクソンの二つの論文「形而上学入門」(« Introduction à la métaphysique », 1903) と「哲学的直観」(« Intuition philosophique », 1911)、およびそれらに関連する研究論文を参照し、持続と揺れの関係のあり方の変化について追究する。これらの議論によって我々は、揺れの解釈に関わる論点がベルクソン哲学内部の概念と繋がりを保ちつつも、ベルクソン哲学の外部に向かって開かれていることを示す。

## 結

以上の議論を経て、本論は、揺れがベルクソン哲学の解釈にとって重要な語であると結論づける。ベルクソン研究において揺れは正面から取り上げられてこなかったが、揺れは決してベルクソン哲学の本質を損なうものではない。それはむしろ、幾何学の問題を解く際に引かれる補助線のように、ベルクソン哲学の理解をさらに深めるための手段を提供する。よって本論は、ベルクソン哲学において揺れに注目する意義を示しえたと言えるだろう。